

[農産物安全確保調査分析事業（本庁所管事業）]
露地キュウリ隔離床栽培における培地および施肥方法の検討

野口 貴・荒木俊光・海保富士男
(商品開発科)

【要 約】 隔離床の培地は、クリプトモスよりもココピートが適し、施肥方法では、液肥の単独施用よりも、固形肥料の基肥施用が適する。

【目 的】

ディルドリン対策の一環として、露地キュウリの隔離床栽培を確立する。本試験では、防根透水シートを用いた簡易隔離床を試作し、適正な培地および施肥方法を明らかにする。

【方 法】

- 1) 培地の種類：隔離床は、畝幅を240cmとして幅40cm深さ30cmの溝を掘り、防根透水シートを敷き、培地としてココピートまたはクリプトモスを設置した。「夏すずみ」および台木「きらめき」を2007年4月17日に播種し、27日に呼接ぎして楽苗システムへ移植した。5月18日に各隔離床へ株間30cmで定植し、1株おきに床の左右に振り分けて誘引した。肥料はOKF-6号を用い、最終投入量が窒素成分量で25kg/10aとなるように液肥で施用した。対照の土耕栽培では、畝幅240cm、ベッド幅100cm、株間60cmの2条植えとした。施肥は、基肥として窒素成分量で15kg/10a、追肥として5kg/10aを2回とした。いずれも白黒ダブルマルチを用いた。
- 2) 施肥方法：8月14日に「夏すずみ」を播種し、楽苗システムで育苗後、8月31日に定植した。隔離床は、ココピート培地を用い、試験区は施肥方法により、①全量液肥、②IB化成S1号（固形肥料）を基肥として窒素成分量で15kg/10a施用（以下、固15と記す）、③同20kg/10a（固20）、④同25kg/10a（固25）の4区とし、総窒素成分量が25kg/10aになるよう、不足分を液肥OKF-6号で追肥した。対照の土耕栽培は前述の方法に準じた。

【成果の概要】

- 1) 培地の比較において、初期の生育状況を見ると、隔離床では葉色が淡かった（図1）。クリプトモス培地では特に淡く、生育が劣った。
- 2) 1株あたり収穫本数は、隔離床で少なく、クリプトモス培地では土耕の1/3程度であった（図2）。また、隔離床では収穫物の半数以上が下物果であり、内訳では短形の比率が高く、ココピートでは尻細果が多かった（図3）。
- 3) 時期別着果数をみると、土耕では早期から側枝への着果がみられ、総収量は側枝に依存した。一方、隔離床では側枝への着果が遅れ、後期まで主枝に着果がみられた（図4）。
- 4) 施肥方法の違いの影響についてみると、収穫本数は慣行の土耕が最も多く、次に3つの固形肥料施用区が並び、全量液肥区が最も少なかった（図5）。全量液肥区では短形果が多かった（図6）。
- 5) 各試験区の着果様式をみると、隔離床での主枝着果数は土耕と同程度であったが、側枝着果数は少なかった。全量液肥区では、後期に可販果が収穫できなかった（図7、8）。
- 6) 以上から、隔離床培地ではココピートが適し、基肥として固形肥料が必要である。

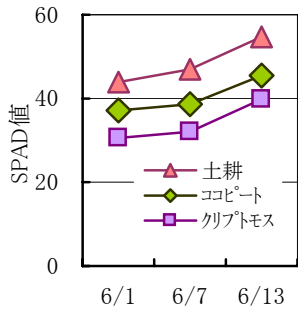


図1 培地の種類と葉色

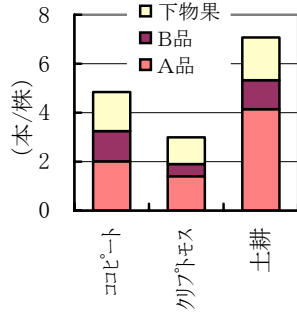


図2 培地の種類と収穫本数

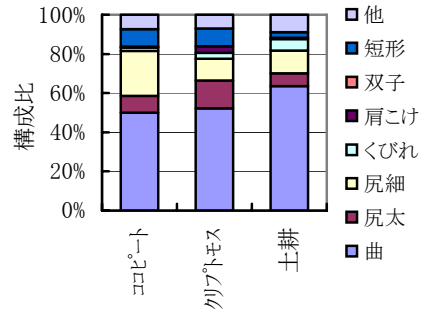


図3 隔離床栽培での下物の内訳

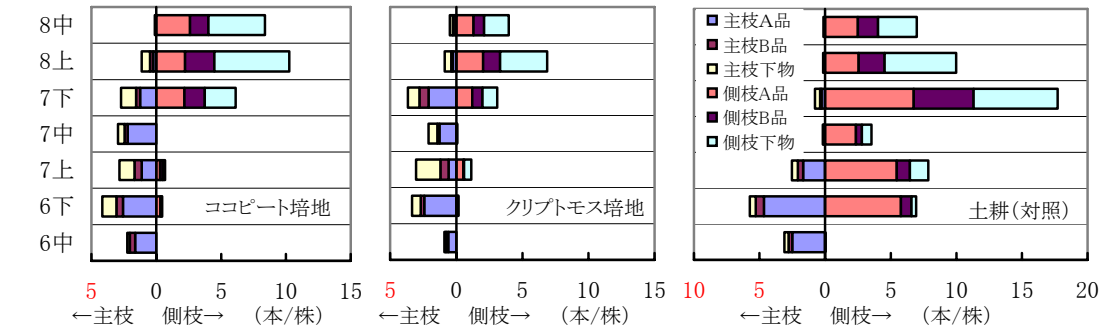


図4 隔離床栽培における収穫期の着果様式の推移 (左からコロピート(隔離床), クリプトモス(隔離床), 土耕)

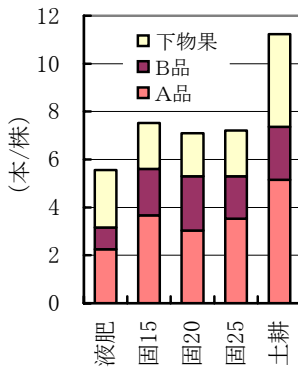


図5 施肥方法と収穫本数

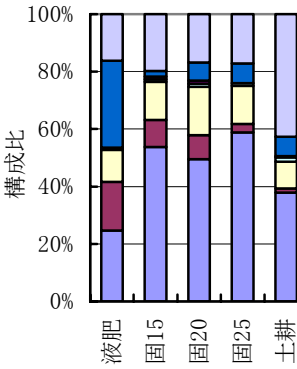


図6 施肥方法と下物の内訳

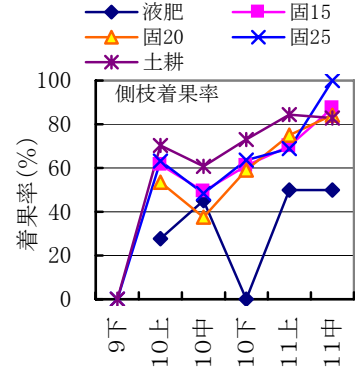


図7 施肥方法と側枝着果率

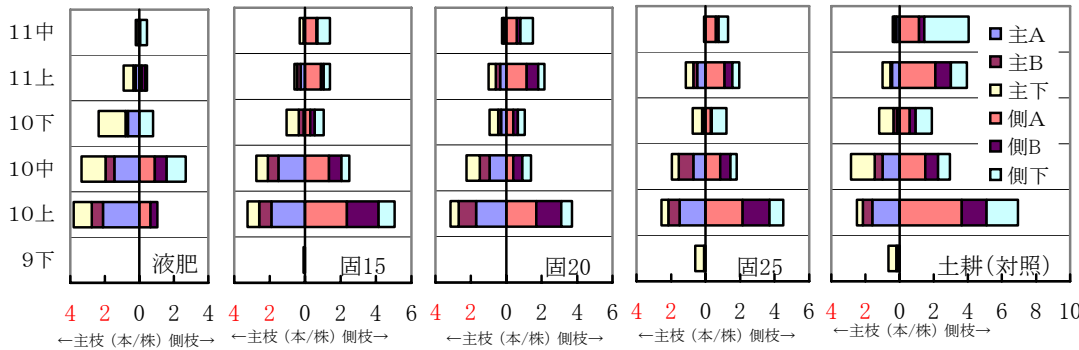


図8 施肥方法と収穫期における着果様式の推移 (凡例 主:主枝, 側:側枝, A:A品, B:B品, 下:下物)